

| | |
|--------------|---|
| Title | 居場所がある / ないという意識に関する基礎的研究 性差・時期差，精神的健康・心理的居場所感との関 連，時間的安定性 |
| Author(s) | 安達，奈緒子；安達，知郎 |
| Citation | 弘前大学教育学部紀要，118，p.159-168，2017 |
| Issue Date | 2017-10-13 |
| URL | http://hdl.handle.net/10129/6286 |
| Rights | |
| Text version | publ isher |



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

居場所がある／ないという意識に関する基礎的研究 —性差・時期差，精神的健康・心理的居場所感との関連，時間的安定性—

The basic property of the consciousness of ‘I have IBASHO’ or ‘I don't have IBASHO’

安達奈緒子*・安達 知郎**

Naoko ADACHI*・Tomoo ADACHI**

要 旨

「居場所」という言葉は，それぞれの人がそれぞれに意味を見出しうる重層的な言葉である。居場所の多義性は心理臨床において重要であると考えられる。本研究では，その多義性を保持して実証的研究を行うねらいから，「居場所がある」「居場所がない」という意識（居場所意識）に注目し，居場所意識の基本的性質（性差・時期差，精神的健康・心理的居場所感との関連，時間的安定性）を明らかにすることを目的とした。居場所意識，精神的健康，心理的居場所感を測定する質問紙調査を3回，実施した（協力者は大学生計497名であった）。その結果，第一に，居場所あり意識と居場所なし意識は対極に位置するものではないこと，第二に，居場所あり意識は必ずしも精神的健康と関連するものではなく，女性では精神的な不健康と関連していること，第三に，女性は男性に比べて居場所なし意識が時期を越えて維持されやすいことが明らかにされた。一方で，居場所意識測定項目の時間的安定性については評価基準が明確でなく，この点についてさらに検討が必要と考えられた。

Abstract

This study investigated the consciousness of ‘I have IBASHO’ or ‘I don't have IBASHO’ and aimed to clarify the property of these ‘IBASHO’ consciousness. University student (total n=497) completed questionnaires about ‘IBASHO’ consciousness, mental health, and psychological ‘IBASHO’ in three surveys. The results were followings; (a) The consciousness of ‘I have IBASHO’ and ‘I don't have IBASHO’ were not opposition. (b) The consciousness of ‘I have IBASHO’ was not related to mental health in males, and it was related to mental ill health in females. (c) Females kept the consciousness of ‘I don't have IBASHO’ across time more than males. In addition, the time stability of measurement items about ‘IBASHO’ consciousness didn't become clear.

キーワード：居場所，居場所意識，精神的健康，心理的居場所感

Keyword：IBAHSO, the consciousness of ‘IBASHO’, mental health, psychological ‘IBASHO’

1. 問題と目的

臨床心理学の分野において，近年，「居場所」という言葉が注目されている。この背景には，1980年代，不登校問題の増加によって学校外の「居場所」が注目され始めたこと，さらに，1992年に文部省学校不適応

対策調査研究協力者会議で「登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—」という報告が出されたことがある（安齋，2003；住田・南，2003）。

居場所の重要な特徴はその意味の多義性にあると考えられる。これまで，居場所に関する自由記述を求

* 東北大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Tohoku University
* 弘前大学教育学部
Faculty of Education, Hirosaki University

め、そのデータを分析するという研究がいくつか行われてきた（安達・安達，2017；中村，1999；小畑・伊藤，2001など）。これらの研究により、「居場所」という言葉には、時間、空間、他者の存在の有無、評価の有無など、多様な意味が重なり合っていることが明らかにされてきた。また、杉本・庄司（2006a）は居場所の心理的機能が「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」から成ることを明らかにした。このように居場所の意味の多義性が明らかにされてきた一方で、定量的に居場所を扱うためにその意味の多義性を統制することも試みられてきた。意味の多義性を統制する手段として、先行研究では居場所を一定の枠組みから定義してきた。居場所に関する研究を概観した石本（2009）は、不登校問題の現場や心理臨床などの分野では、居場所が「ありのままでいられる」と「役に立っていると思える」との2つのキーワードで語られる場合が多いことを見出した。さらに、居場所を操作的に定義する尺度も作成されている。代表的なものとして、居場所の意味を「心の居場所」に限定した「青年版心理的居場所感尺度」「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」の4下位尺度から成る（則定，2007）がある。

研究の視点からは居場所の多義性を統制することが重要であるが、心理臨床の視点からは、むしろ、居場所の多義性に注目することが重要である。居場所を操作的に定義した研究では、研究者の意図した居場所について取り上げることが可能である。しかし、「居場所」という言葉には日常語としての側面がある。日常語としての居場所について、小沢（2002）は、第一に、日常の世界を生きる自分と離れずに使用できる、第二に、日常生活の中から個人を切り取らずに、自分と生きている世界をともに捉えることができる、第三に、主観的視点をとることで、個人が自分の主観によって自分自身を省みることができるという意義を指摘した。日常語として多用される「居場所」という言葉は、使用している個人およびその背景となる文脈を強く反映していると考えられる。時岡（2016）は、心理臨床分野での日常語の果たす役割の大きさを指摘しており、居場所についても、その意味の多義性こそが、心理臨床実践においては重要となると考えられる。

本研究では、居場所の意味の多義性を重視すると同時に、それを実証的に扱う方法として、「居場所がある」「居場所がない」という意識（以下、それぞれ、

居場所あり意識、居場所なし意識、また、両者を合わせて居場所意識とする）に注目する。居場所の意味の多義性を重視することとそれを実証的に扱うことは、互いに矛盾する。しかし、「居場所がある」「居場所がない」という意識に注目すると、居場所に関する意識について新たな接近が可能になると考えられる。「居場所がある」「居場所がない」という意識の程度は測定可能である。一方で、「居場所」という言葉の解釈は回答者に委ねられており、意味の多義性が担保される。居場所意識を実証的に扱った先行研究として、白井（1998）、杉本・庄司（2006a）などがある。しかし、これらの研究では、居場所の有無を2択やりっカード法で尋ねており、居場所の有無が対極にあることを前提としている。安斎（2003）、北山（1993）は臨床的視点から、居場所はそれ自体で存在するのではなく、場合によっては「ない」という感覚により存在が掴めると指摘した。つまり、居場所があるという感覚は、居場所がないという感覚の対極に単純にあるわけではないと考えられる。本研究では居場所の有無を区別し、居場所あり意識と居場所なし意識を別々に測定する。そうすることで、多義的な意味をもつ居場所を定量的に扱うことが可能となり、これまでの居場所研究に新たな知見をもたらすことが期待できる。

本研究の目的は、これまで研究されてこなかった居場所意識の基本的性質を明らかにし、今後の居場所意識研究に寄与する基礎的データを収集することである。具体的には、居場所意識の性差、時期差（小学校高学年、中学校、高等学校、大学）、居場所意識の時期間での関連、居場所意識と精神的健康との関連、居場所意識と心理的居場所感（居場所の意味を「心の居場所」に限定した概念）との関連、および、居場所意識の時間的安定性を探索的に明らかにすることである。

2. 方法

調査は目的に合わせ3回実施した。調査1, 2は、居場所意識の性差、時期差を検討するために実施した。調査2は、居場所意識と精神的健康、心理的居場所感との関連、および、居場所意識の時間的安定性を、調査3は居場所意識の時間的安定性を調べるために実施した。いずれの調査計画についても、調査を実施した大学の倫理審査委員会において承認を得た。

1) 調査1

調査協力者

大学生199名（男性93名，女性98名，不明8名，平均年齢19.12歳，標準偏差 .82）を対象に質問紙調査を実施した。

調査時期および手続き

2015年1月に，無記名の質問紙を大学の講義時に配布し，一斉に実施した。実施に当たっては，回答は統計的に処理されること，回答は任意であることなどを書面，および，口頭で説明した。

質問紙構成（本研究に関連するもののみ）

①フェイスシート 性別，年齢を尋ねた。

②居場所意識 過去から現在の居場所の有無の意識について尋ねた。居場所がある，居場所がない，という意識の程度を，学校段階ごと（小学校高学年，中学校，高校，大学現在）に回答を求めた。小学校高学年から居場所意識を尋ねたのは，先行研究（杉本・庄司，2006a）において，小学校高学年が居場所に関する質問紙調査に回答しており，居場所意識についても，同時期から捉えることが可能と考えたためである。「全く意識していなかった」から「とても意識していた」までの7件法により回答を求めた。

2) 調査2

調査協力者

大学生149名（男性66名，女性74名，不明9名，平均年齢18.48歳，標準偏差 .79）を対象に質問紙調査を実施した。

調査時期および手続き

2017年6月に，調査1と同様の手続きで実施した。

質問紙構成（本研究に関連するもののみ）

①フェイスシート 性別，年齢，マッチング番号（再検査した際のデータとのマッチングを行うための番号）の記入を求めた。

②居場所意識 調査1と同様であった。

③精神的（不）健康 Goldberg & Hiller (1979) のGHQ12の日本語版（中川・大坊，1985）を用いた。この尺度は精神的（不）健康度を測定する尺度であり，「何かをする時いつもより集中して」（回答は「できた」「いつもと変わらなかった」「できなかった」「全くできなかった」の4件法），「心配事があるって，よく眠れないようなことは」（「全くなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」）など12項目から成る。得点が高いほど，精神的健康度が低いことを意味する。

④心理的居場所感 則定（2007）の青年版心理的居場所感尺度を用いた。この尺度は居場所の中でも「心の居場所」つまり，心理的居場所感を測定する尺度である。この尺度は本来感（「〇〇と一緒にいると，ありのままの自分を表現できる」「〇〇と一緒にいると，ありのままの自分でいいのだと感じる」など4項目），役割感（「〇〇の役に立っている」「〇〇の支えになっている」など6項目），被受容感（「〇〇に無条件に愛されている」「〇〇は，私を大切にしている」など6項目），安心感（「〇〇と一緒にいると，ホッとする」「〇〇と一緒にいると，安心する」など4項目）の4下位尺度から成る。則定（2007）では，〇〇に「父親，あるいは父親に代わる人」「母親，あるいは母親に代わる人」「親友」を代入していた。しかし，本研究では協力者の負担を軽減するため，居場所からイメージする言葉の上位に「家族」「友だち」が入っていたこと（安達・安達，2017）を踏まえ，〇〇には「家族」と「友だち」を代入した。得点が高いほど，本来感，役割感，被受容感，安心感を強く覚えていることを意味する。

3) 調査3

調査協力者

大学生149名（男性66名，女性74名，不明9名，平均年齢18.46歳，標準偏差 .79）を対象に質問紙調査を実施した。

調査時期および手続き

調査2の2週間後，調査1と同様の手続きで実施した。

質問紙構成（本研究に関連するもののみ）

①フェイスシート 性別，年齢，マッチング番号（再検査した際のデータとのマッチングを行うための番号）の記入を求めた。

②居場所意識 調査1と同様であった。

3. 結果

分析にはSPSS22.0を用いた。

分析対象者

調査1，2については調査協力者全員を，調査3については調査2のデータとマッチングが可能であった108名（男性44名，女性57名，不明7名，平均年齢18.38歳，標準偏差 .76）を分析対象とした。ただし，欠損，不備があるデータは分析ごとに除外した。

居場所意識の正規性

各時期の居場所意識の正規性を確認するため、Kolmogorov-Smirnov 検定を行ったところ、すべての居場所意識について正規性が確認されなかった。そこで以下の分析ではすべて、ノンパラメトリック分析を行った。

居場所意識の性差，時期差

まず、各時期における居場所あり意識、なし意識それぞれについて、時期ごとに性差を検討した (Mann-Whitney の U 検定)。さらに、性別ごとに時期差を検討した (Friedman 検定)。結果を表1、表2に示す。

結果、居場所あり意識について、小学高、中学、高校、大学において、女性の得点が男性の得点より有意に高かった (小学高: $U=10294.50$, $p<.001$, 中学: $U=10864.00$, $p<.01$, 高校: $U=11514.00$, $p<.05$, 大学: $U=11335.00$, $p<.01$)。また、男性において、時期間に有意差が見られた ($\chi^2(3)=77.41$, $p<.001$)。下位検定 (Wilcoxon の符号付き順位検定, bonferroni。以下同様) の結果、中学、高校、大学が小学高よりも、高校が中学よりも得点が有意に高かった。女性に

おいても、時期差に有意差が見られた ($\chi^2(3)=66.04$, $p<.001$)。下位検定の結果、中学、高校、大学が小学高よりも、高校が中学よりも得点が有意に高かった。

居場所なし意識について、小学高、中学において、女性の得点が男性の得点より有意に高かった (小学高: $U=9745.50$, $p<.001$, 中学: $U=10770.50$, $p<.01$)。大学において、女性の得点が男性の得点より有意傾向水準で高かった ($U=11720.00$, $p<.10$)。また、男性において時期間に有意差が見られた ($\chi^2(3)=40.15$, $p<.001$)。下位検定の結果、中学、高校が小学高よりも、高校が大学よりも得点が有意に高かった。女性においても、時期差に有意差が見られた ($\chi^2(3)=46.49$, $p<.001$)。下位検定の結果、中学が小学高、大学よりも、高校が大学よりも得点が有意に高かった。

居場所あり意識、なし意識、いずれについても性差が見られたことから、以下の分析では男女別に分析する (時間的安定性は除く)。

居場所意識の時期間での関連

居場所意識の時期間での関連を見るため、相関 (spearman) 分析を行った (表3、表4)。

結果、男性では、小学高居場所ありと大学居場所な

表1 居場所あり意識の時期差，性差

| | 男性 | | | 女性 | | | 性差 | |
|--------------|-------------|------|------|-------------|------|------|--------------|-------|
| | n | Mean | SD | n | Mean | SD | U | |
| 小学高 | 159 | 3.32 | 1.91 | 170 | 4.11 | 1.71 | 10294.50 *** | f > m |
| 中学 | 158 | 4.12 | 1.83 | 171 | 4.77 | 1.55 | 10864.00 ** | f > m |
| 高校 | 158 | 4.61 | 1.88 | 171 | 5.12 | 1.52 | 11514.00 * | f > m |
| 大学 | 158 | 4.41 | 1.86 | 171 | 4.94 | 1.54 | 11335.00 ** | f > m |
| 学年差 χ^2 | 77.41 *** | | | 66.04 *** | | | | |
| | 小高<中学・高校・大学 | | | 小高<中学・高校・大学 | | | | |
| | 中学<高校 | | | 中学<高校 | | | | |

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表2 居場所なし意識の時期差，性差

| | 男性 | | | 女性 | | | 性差 | |
|--------------|-----------|------|------|-----------|------|------|-------------|-------|
| | n | Mean | SD | n | Mean | SD | U | |
| 小学高 | 158 | 3.08 | 1.96 | 172 | 4.03 | 1.80 | 9745.50 *** | f > m |
| 中学 | 156 | 3.88 | 1.95 | 171 | 4.57 | 1.74 | 10770.50 ** | f > m |
| 高校 | 156 | 4.07 | 1.97 | 171 | 4.32 | 1.84 | 12450.00 | |
| 大学 | 156 | 3.57 | 1.81 | 171 | 3.94 | 1.67 | 11720.00 † | f > m |
| 学年差 χ^2 | 40.15 *** | | | 46.49 *** | | | | |
| | 小高<中学・高校 | | | 小高<中学 | | | | |
| | 大学<高校 | | | 大学<中学・高校 | | | | |

*** $p<.001$, ** $p<.01$, † $p<.10$

表3 居場所意識の時期間相関 (spearman) (男性)

| | 小学高 居場所あり | 小学高 居場所なし | 中学 居場所あり | 中学 居場所なし | 高校 居場所あり | 高校 居場所なし | 大学 居場所あり | 大学 居場所なし |
|-----------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 小学高 居場所あり | | .51 *** | .57 *** | .23 ** | .40 *** | .18 * | .36 *** | .09 |
| 小学高 居場所なし | | | .23 ** | .56 *** | .08 | .42 *** | .10 | .20 * |
| 中学 居場所あり | | | | .33 *** | .68 *** | .23 ** | .49 *** | .20 * |
| 中学 居場所なし | | | | | .26 ** | .61 *** | .15 | .34 *** |
| 高校 居場所あり | | | | | | .26 *** | .65 *** | .30 *** |
| 高校 居場所なし | | | | | | | .21 ** | .58 *** |
| 大学 居場所あり | | | | | | | | .37 *** |
| 大学 居場所なし | | | | | | | | |

n=156-158

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表4 居場所意識の時期間相関 (spearman) (女性)

| | 小学高 居場所あり | 小学高 居場所なし | 中学 居場所あり | 中学 居場所なし | 高校 居場所あり | 高校 居場所なし | 大学 居場所あり | 大学 居場所なし |
|-----------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 小学高 居場所あり | | .44 *** | .61 *** | .32 *** | .37 *** | .20 ** | .22 ** | .26 *** |
| 小学高 居場所なし | | | .23 ** | .62 *** | .16 * | .48 *** | .11 | .48 *** |
| 中学 居場所あり | | | | .21 ** | .51 *** | .17 * | .38 *** | .21 ** |
| 中学 居場所なし | | | | | .19 * | .61 *** | .17 * | .51 *** |
| 高校 居場所あり | | | | | | .19 * | .56 *** | .24 ** |
| 高校 居場所なし | | | | | | | .23 ** | .63 *** |
| 大学 居場所あり | | | | | | | | .25 ** |
| 大学 居場所なし | | | | | | | | |

n=170, 171

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

しとの間、小学高居場所なしと高校居場所あり、大学居場所ありとの間、中学居場所なしと大学居場所ありとの間以外では、有意な正の相関が見られた。とくに、小学高居場所ありと小学高居場所なし ($r=.51$)、中学居場所あり ($r=.57$) との間、小学校高居場所なしと中学居場所なし ($r=.56$)、高校居場所なし ($r=.42$) との間、中学居場所ありと高校居場所あり ($r=.68$)、大学居場所あり ($r=.49$) との間、中学居場所なしと高校居場所なし ($r=.61$) との間、高校居場所ありと大学居場所あり ($r=.65$) との間、高校居場所なしと大学居場所なし ($r=.58$) との間に比較的強い相関が見られた。

女性では、小学高居場所なしと大学居場所ありとの間以外では、有意な正の相関が見られた。とくに、小学高居場所ありと小学高居場所なし ($r=.44$)、中学居場所あり ($r=.61$) との間、小学高居場所なしと中学居場所なし ($r=.62$)、高校居場所なし ($r=.48$)、大学居場所なし ($r=.48$) との間、中学居場所ありと高校居場所あり ($r=.51$) との間、中学居場所なしと高校

居場所なし ($r=.61$)、大学居場所なし ($r=.51$) との間、高校居場所ありと大学居場所あり ($r=.56$) との間、高校居場所なしと大学居場所なし ($r=.63$) との間に比較的強い相関が見られた。

さらに、居場所あり意識、居場所なし意識それぞれの時期間 (小学高居場所あり (なし) と中学居場所あり (なし)、高校居場所あり (なし)、大学居場所あり (なし) との間、中学居場所あり (なし) と高校居場所あり (なし)、大学居場所あり (なし) との間、高校居場所あり (なし) と大学居場所あり (なし) との間) で相関係数の差を検定したところ、男性では、居場所あり意識で小学高と中学との相関係数が小学高と大学との相関係数 ($Z=2.31$, $p < .05$) より、中学と高校との相関係数が中学と大学との相関係数 ($Z=2.50$, $p < .05$) より、居場所なし意識で小学高と高校との相関係数が小学高と大学との相関係数 ($Z=2.09$, $p < .05$) より、中学と高校との相関係数が中学と大学 ($Z=3.02$, $p < .01$) との相関係数より有意に大きかった。女性では、居場所あり意識で小学高と中学との相関係数が小

学高と高校との相関係数 ($Z=2.85, p<.01$), 小学高と大学との相関係数 ($Z=4.32, p<.001$) より有意に大きかった。

居場所意識と精神的 (不) 健康との関連

居場所意識と精神的 (不) 健康との関連を明らかにするため, 居場所意識と GHQ12との相関 (spearman) を求めた (表5)。

結果, 男性では, 中学居場所なし ($r=.28$), 高校居場所なし ($r=.32$), 大学居場所なし ($r=.42$) との間には有意な正の相関が見られた。とくに大学居場所なしとの間には比較的強い相関が見られた。女性では, 小

学高居場所あり ($r=.29$), 小学高居場所なし ($r=.23$), 中学居場所なし ($r=.23$), 高校居場所あり ($r=.27$), 大学居場所なし ($r=.29$) との間には有意な正の相関が見られた。また, 中学居場所ありとの間には有意傾向水準の正の相関が見られた ($r=.23$)。

居場所意識と心理的居場所感との関連

居場所意識測定項目と既存の居場所関連尺度との関連を明らかにするため, 居場所意識と心理的居場所感との相関を求めた (表6, 7)。

結果, 男性では, 心理的居場所感 (家族) の本来感と大学居場所なし ($r=-.42$) との間, 心理的居場所

表5 精神的健康 (GHQ12) と居場所意識との相関 (spearman)

| | 小学高 居場所あり | 小学高 居場所なし | 中学 居場所あり | 中学 居場所なし | 高校 居場所あり | 高校 居場所なし | 大学 居場所あり | 大学 居場所なし |
|----|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 男性 | -.03 | .05 | .06 | .28 * | .14 | .32 * | .13 | .41 ** |
| 女性 | .29 ** | .23 * | .19 † | .23 * | .27 * | .18 | .14 | .29 * |

男性 : $n=59, 60$ 女性 : $n=77, 78$
 ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

表6 居場所意識と心理的居場所感との相関 (spearman) (男性)

| | | 小学高 居場所あり | 小学高 居場所なし | 中学 居場所あり | 中学 居場所なし | 高校 居場所あり | 高校 居場所なし | 大学 居場所あり | 大学 居場所なし |
|----------------------|------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 心理的 居場所感 (家族) | 本来感 | -.17 | -.23 † | -.08 | -.29 * | -.12 | -.33 * | -.26 * | -.42 *** |
| | 役割感 | .00 | -.08 | .07 | -.18 | -.01 | -.24 † | -.10 | -.31 * |
| | 被受容感 | .08 | -.09 | .06 | -.17 | .10 | -.21 | -.06 | -.32 * |
| | 安心感 | -.14 | -.29 * | -.06 | -.33 ** | .05 | -.33 * | -.09 | -.36 ** |
| 心理的 居場所感 (友だち) | 本来感 | .01 | -.12 | .07 | -.28 * | -.11 | -.34 ** | -.06 | -.28 * |
| | 役割感 | -.01 | -.09 | .10 | -.26 * | -.09 | -.37 ** | -.07 | -.32 * |
| | 被受容感 | .06 | -.12 | .12 | -.23 † | .02 | -.35 ** | .03 | -.20 |
| | 安心感 | -.12 | -.25 † | .06 | -.32 * | -.04 | -.42 *** | .03 | -.27 * |

$n=58-60$
 *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

表7 居場所意識と心理的居場所感との相関 (spearman) (女性)

| | | 小学高 居場所あり | 小学高 居場所なし | 中学 居場所あり | 中学 居場所なし | 高校 居場所あり | 高校 居場所なし | 大学 居場所あり | 大学 居場所なし |
|----------------------|------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 心理的 居場所感 (家族) | 本来感 | -.003 | -.23 * | .19 | -.20 † | .12 | -.15 | .01 | -.20 † |
| | 役割感 | .18 | -.21 † | .25 * | -.19 † | .27 * | -.19 † | .14 | -.10 |
| | 被受容感 | .09 | -.12 | .16 | -.19 † | .13 | -.19 † | .03 | -.20 † |
| | 安心感 | .05 | -.17 | .19 † | -.15 | .14 | -.14 | .04 | -.10 |
| 心理的 居場所感 (友だち) | 本来感 | -.13 | -.26 * | -.06 | -.21 † | .01 | -.06 | .07 | -.32 * |
| | 役割感 | .07 | -.26 * | .15 | -.17 | .13 | -.20 † | .13 | -.21 † |
| | 被受容感 | -.07 | -.37 *** | .10 | -.16 | .16 | -.20 † | .09 | -.38 *** |
| | 安心感 | -.21 † | -.25 * | -.05 | -.17 | .08 | -.05 | .01 | -.35 ** |

$n=78, 79$
 *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

感（友だち）の安心感と高校居場所なし ($r=-.42$) との間に有意な負の比較的強い相関が見られた。女性では、有意な負の相関はいくつか見られたが、それらの大きさはいずれも弱い、ほとんどないかであった。

居場所意識の時間的安定性

居場所意識の時間的安定性を測定するため、調査2と調査3でマッチング可能であったデータの相関を求めた（表8）。

結果、いずれについても、有意な正の比較的強い相関が見られた。ただし、小学高居場所あり ($r=.52$)、中学居場所なし ($r=.596$)、大学居場所あり ($r=.55$) では .60以下であった。

4. 考察

居場所意識の性差，時期差

居場所意識の性差を検討したところ、女性の方が男性よりも居場所あり意識、居場所なし意識、いずれについても意識しやすいことが明らかになった。大学新入生を対象として「居場所」に関する自由記述のテキストマイニングを行った安達・安達（2017）は、女性の方が男性よりも居場所概念がより分化していることを明らかにした。つまり、大学入学時において、女性は男性に比べ、居場所について、より複雑な文脈で捉えていると考えられる。また、青年期の心理的居場所感の性差を検討した則定（2008）は、女性の方が男性よりもおおむね、心理的居場所感得点が高いことを明らかにした。これらの先行研究から、女性は男性よりも、心理的居場所感を含め、居場所についてより意識していると考えられる。本研究の結果は、それを裏付けるものであると考えられる。

また、居場所意識の時期差を検討したところ、居場所あり意識については男性、女性ともに、高校まで徐々に意識しやすくなり、大学に入ってもそれが維持されることが明らかになった。居場所なし意識については、男性、女性ともに中学、高校で強く意識するが、大学に入ると意識することが少なくなることが明らかになった。居場所あり、居場所なしに関わらず、居場所意識が高校まで高まるという結果は、自

己意識の発達に鑑みると、妥当と考えられる。人は、「居場所」という言葉を日常場面で用いるとき、「自分」との関係で「居場所」という言葉を用いる（小沢，2002）。つまり、自分について意識する機会が増えれば増えるほど、居場所について意識する機会も増えると考えられる。自己意識は高校に至るまで年齢とともに強くなる（Montemayer & Eisen, 1977）。このように自己意識が強まる背景には、青年期前期における身体的変化、つまり第2次性徴、社会的変化、つまり、親から友だちへの依存、さらに依存から自立への移行があると考えられる（遠藤，1995）。大学に入ると、身体的な変化が落ち着くだけでなく、将来展望がより具体的に意識される。さらに、大学生活を自らの手で築くなかで、両親、友だちとの間にも心理的、物理的に一定の距離がとれるようになる。このように身体的、社会的、心理的状況が落ち着く中で、居場所意識の高まりが収まったと考えられる。とくに居場所なし意識は大学において低下している。これは、居場所あり意識に比べ、居場所なし意識のほうにわれわれが敏感であるためと考えられる。北山（1993）は「居場所とは、いつも失われてはじめて、「ありがたさ」が分かるという類いのもの」とした。安斎（2003）も、今自分の居る場所が「居心地が悪い」「居たくない」「居られない」と感じられて初めて、「居場所」という言葉がクローズアップされるとした。そのため、身体的、社会的、心理的変化の影響が居場所あり意識に比べ、居場所なし意識により強く見られたと考えられる。

居場所意識の時期間での関連

居場所意識の時期間での関連を検討したところ、男性、女性ともに居場所あり意識、なし意識それぞれの時期間での相関は有意であった。ただし、男性では時期が開くほど、相関係数の強さが小さくなるのに対して、女性、とくに女性の居場所なし意識ではそのような傾向は見られなかった。この結果から、一度、居場所を意識したことがある人は、その後も居場所を意識しやすと考えられる。とくにその傾向は女性の居

表8 居場所意識の時間的安定性 (spearman)

| 小学高 居場所あり | 小学高 居場所なし | 中学 居場所あり | 中学 居場所なし | 高校 居場所あり | 高校 居場所なし | 大学 居場所あり | 大学 居場所なし |
|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| .52 *** | .67 *** | .60 *** | .66 *** | .60 *** | .73 *** | .55 *** | .61 *** |

n=105, 106

*** $p < .001$

場所なし意識で強いと考えられる。女性は男性に比べ、居場所に被受容感を期待している（杉本，2006）。また、「居場所」に関する自由記述においても，対人関係に関する用語を多く用いていた（安達・安達，2017）。一方，20代の女性は，男性に比べ，人間関係に対して，閉鎖的・防衛的であり，ありのままの自己を見せることが少ない（高井，1999）。つまり，この時期の女性は人間関係を重視しているため，人間関係が破綻しないように注意を払っていると考えられる。いいかえれば，女性は対人関係を重視する中で，自分がどのようにその場に身を置くかという点に敏感であるといえる。したがって，女性は居場所に敏感であると考えられる。これらのことから，女性は人間関係がうまくいかなかった体験から大きく影響を受け，人間関係の不調に伴い感じた「居場所がない」という意識を長く保持すると考えられる。

また，男性，女性ともに，各時期で居場所あり意識と居場所なし意識との間に有意な正の相関が見られた。つまり，居場所があると意識しているほど，居場所がないとも意識していることが明らかになった。先行研究（白井，1998；杉本・庄司，2006a）では，居場所の有無を対極に位置づけていたが，本研究の結果からは，両者は対極に位置づけられるものではないことが明らかになった。この結果は，居場所がないことを意識して初めて，居場所を意識するようになるという臨床的知見（北山，1998）とも矛盾しない。居場所あり意識となし意識の異同については，精神的健康，心理的居場所感との関連を踏まえ，項を改めて考察することとする。

居場所意識と精神的（不）健康との関連

居場所意識と精神的健康との関連を検討したところ，男性では，中学以降の居場所なし意識と精神的不健康との間に正の相関が，一方，女性では，中学校以前を中心に居場所あり意識，居場所なし意識，いずれとも精神的不健康と正の相関が見られた。これらの結果から，男性は中学以降に居場所がないと意識したことがあるほど，精神的に不健康であることが明らかになった。また，女性はあり，なしにかかわらず居場所について意識したことがあるほど（とくに中学以前），精神的に不健康であることが明らかになった。居場所と精神的健康との関連を検討したこれまでの研究では，居場所があるほど，精神的健康が高いということが明らかにされている。たとえば，中学生の居場所環境と学校適応との関連を調べた杉本・庄司（2006b）

は，家族のいる居場所，友だちのいる居場所があると答えた生徒の方が居場所がない，あるいは自分ひとりの居場所のみあると答えた生徒よりも学校享受感が高いことを明らかにした。また，大学生を対象に居場所確保度と心理的 well-being との関連を調べた石本（2010）は，個人的居場所ではなく社会的居場所を確保しているほど，心理的 well-being が高いことを明らかにした。居場所をない意識しているほど精神的に不健康であるという本研究の結果は，これら先行研究の結果と矛盾しない。

一方で，本研究の結果，男性では居場所あり意識と精神的健康との間に相関が見られなかった。さらに女性では居場所があると意識しているほど，精神的に不健康であるという結果が得られた。女性において，居場所があると意識しているほど精神的に不健康であるという結果は，先行研究と矛盾する。北山（1998）は，居場所はそれがなくことを体験して初めて意識するようになるとした。居場所は，とくに何もなければ普段は意識しないが，それが失われて初めて意識されるものであると考えられる。つまり，居場所があるという意識は，居場所がないという意識を前提として生じるものであると考えられる。このように，居場所あり意識が居場所なし意識を前提とした複雑な意味をもっているため，精神的健康との間に単純な正の相関が見られなかったと考えられる。また，女性において，居場所あり意識と精神的健康との間に負の関連が見られたのは，女性が男性以上に居場所に敏感であるためと考えられる。上記したように，女性は男性に比べ，対人関係における居場所に敏感である。そのため，居場所がないという意識を一度感じると，それを補うように過剰に居場所があると意識している可能性がある。女性では居場所あり意識が，居場所がない不安を発端とする過剰で依存的なものである可能性があるため，精神的健康との間に負の関連がみられたと考えられる。

居場所意識と心理的居場所感との関連

居場所意識と心理的居場所感との関連について検討したところ，男性では，中学以降の居場所なし意識と心理的居場所感との間に負の相関が見られた。女性では，小学高と大学の居場所なし意識と心理的居場所感（友だち）との間にその傾向が見られた。居場所なし意識のみが関連をもち居場所あり意識が関連をもたないという結果は，精神的健康に関する結果と同様であった。これは上記したように，居場所あり意識が居場所なし意識を前提とした複雑な意味をもっているた

めに生じたと考えられる。

本研究の結果で特徴的なのは、男女で心理的居場所感と関連する居場所なし意識の時期が異なったという結果である。居場所において重要な要因のひとつとして、対人関係が挙げられる（中島・廣出・小長井, 2007）。つまり、豊かな対人関係は居場所があるという意識につながると考えられる。対人関係の中でも特に居場所と関連するもののひとつが友だちとの関係である（安達・安達, 2017）。中学生から大学生までの友だちとのつきあい方を調査した落合・佐藤（1996）は、友だちとのつきあい方について、男性では中学から大学まで変化は見られない（「浅く広く」「深く狭く」「深く広く」「深く狭く」×中学, 高校, 大学のクロス集計表で人数の偏りが見られない）が、女性では「浅く広く」が中学で多く大学で少ないこと、「深く広く」が中学で少なく高校で多いこと、「深く狭く」が中学で少なく大学で多いことを明らかにした。これらの結果から、男性は中学から大学まで友だちとのつきあい方に変化が少ないのに対して、女性は中学から大学にかけて、「浅く広く」から「深く狭く」へと移行していき、友だちとの親密な関係性に入っていくと考えられる。したがって女性は発達に伴い、友だちとのつきあい方が変化していき、時期間で友だちに対する思いが異なると考えられる。一方で、心理的居場所感（則定, 2007; 2008）は「居場所」という名はついているが、直接的に測定しているものは対人関係における本来感、役割感、被受容感、安心感である。これは、重層的な意味をもつ居場所概念を対人関係の視点から切り取ったものであり、居場所概念から切り離しても成立可能な対人関係に関する概念であるとも考えられる。以上のことから、女性では、中学、高校の友だち関係と大学（現在）の友だち関係との関連が少ないため、中学、高校の友だち関係と関連する居場所なし意識と、現在の友だち関係と関連する心理的居場所感（友だち）との間にあまり関連が見られなかったと考えられる。

居場所意識の時間的安定性

居場所意識測定項目の時間的安定性は、.52~.73であった。心理尺度については、再検査信頼性係数の基準はおおむね.70を超えることである（高本・服部, 2015）。この基準に従えば、本研究で用いた居場所意識測定項目は時間的安定性を有しておらず、測定対象である居場所意識が時間とともに変化する状態概念である可能性が高いと考えられる。しかし、本研究で居

場所意識測定に用いた項目は、1項目のみである。再検査信頼性係数のメタ分析を行った小塩（2016）は、測定項目が少なくなるほど、再検査信頼性係数が小さくなることを明らかにした。測定項目数に鑑みれば、心理尺度の再検査信頼性係数の基準を本研究の結果に適用することは妥当ではない可能性がある。以上のことから、本研究の結果のみから、居場所意識測定項目、および、居場所意識の時間的安定性を論じることはできないと考えられる。居場所意識測定項目、および、居場所意識の時間的安定性に関しては今後、さらなる検討が必要である。

今後に向けて

本研究の結果、居場所意識に関して、以下の4点が明らかになった。第一は、居場所あり意識と居場所なし意識は対極に位置するものではないことである。第二は、居場所あり意識は心理的居場所感などと関連が見られないだけでなく、精神的健康と負の関連が見られることである。第三は、女性は男性に比べ、居場所なし意識が時期を越えて維持されやすいことである。そして、第四は、明確な判断基準がないため、居場所意識測定項目の時間的安定性は本研究のみからは評価できないことである。これらの結果はいずれもこれまでの先行研究では明らかにされていなかった点である。よって、さらに居場所意識を研究することで、居場所に関する新たな知見がもたらされると考えられる。

さいごに本研究の限界と今後の課題を2点、述べる。第一は、研究方法の問題である。本研究では、回想法を用いて過去の居場所意識を測定した。回想法であるため、現時点での居場所意識が過去の居場所意識に影響を及ぼしている可能性は否定できない。今後は、縦断研究、横断研究を行うなどして、居場所意識の時間的違いを明らかにしていくことが重要である。第二は、時間的安定性の問題である。本研究では、再検査信頼性を用いて、居場所意識（測定項目）の時間的安定性を明らかにしようと試みたが、明確な判断基準がなく、結果を十分に評価できなかった。今後は、なんらかの出来事の前後で居場所意識を測定する、居場所意識と状態変数との関連を調べるなどして、居場所意識の時間的安定性を明らかにしていくことが重要である。

文献

- 安達奈緒子・安達知郎 2017 大学新生生の居場所概念に関する研究—自由記述のテキストマイニング— CAMPUS HEALTH, 54(2), 179-185.
- 安齊智子 2003 「居場所」概念の変遷. 発達, 24(96), 33-37.
- 遠藤利彦 1995 性的成熟とアイデンティティの模索 発達心理学 無藤隆・久保ゆかり・遠藤利彦 発達心理学 pp. 111-131.
- Goldberg, D. P. & Hillier, V. F. 1979 A scaled version of the General Health Questionnaire. *Psychological Medicine*, 9, 139-145.
- 石本雄真 2009 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要, 3, 93-100.
- 石本雄真 2010 こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から— カウンセリング研究, 43, 72-78.
- 北山修 1993 日本語臨床の深層 第3巻 自分と居場所 岩崎学術出版社.
- Montemayer, R. & Eisen, M. 1977 The development of self-conception from childhood to adolescence. *Developmental Psychology* 13, 314-319.
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 2007 「居場所」概念の検討 三重大学教育学部研究紀要, 58, 社会科学 77-97.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本語版 GHQ 精神健康調査票 手引き 日本文化科学社
- 中村泰子 1999 「居場所がある」と「居場所がない」との比較—○△□法の基礎的研究として— 児童・家族相談所紀要, 16, 13-22.
- 則定百合子 2007 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 337.
- 則定百合子 2008 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 落合良行・佐藤有耕 青年期における友達とのつきあひ方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 小畑豊美・伊藤義美 2001 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類— 情報文化研究, 14, 59-73.
- 小塩真司 2016 心理尺度構成における再検査信頼性係数の評価—「心理学研究」に掲載された文献のメタ分析— 心理学評論, 59, 68-83.
- 小沢一仁 2002 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工芸大学工学部紀要人文・社会編, 25, 30-40.
- 白井利明 1998 学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連— 日本青年心理学会大会発表論文集, 6, 34-35.
- 杉本美映・庄司一子 2006a 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 杉本希映・庄司一子 2006b 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究 学校心理学会, 6, 31-39.
- 住田正樹・南博文(編) 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在. 九州大学出版会
- 高井範子 1999 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究 教育心理学研究, 47, 317-327.
- 高本真寛・服部環 2015 国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向 心理学評論, 58, 220-235.
- 時岡良太 2016 「自分がない」という日常語の意味についての心理臨床学的考察 心理臨床学研究, 33, 625-634.

(2017. 8. 8 受理)